

「環境未来都市・下川」への疑問③

ルポライター・滝川康治(下川町在住)

机上プランと現実との落差

皆で森づくりを

「2011年に270人の林業・林産業従事者数を15年に350人へ」「素材供給量は1・4万立方メートルから4万立方メートルへ増やす」。

昨年、下川町が策定した「環境未来都市計画」にはこんな数値目標が並ぶ。

だが、現実には甘くない。この20年間に6つの木工場が姿を消し、昨年は造材部門も擁していた市村組が倒産。わずか数年間で林業従事者を80人も増やす計画は、誰が見ても無理がある。絵空事だろう。

「どの木工場も施設・機械の老朽化や後継者問題があり、森林組合は集成材の扱いに課題を抱える。10〜15年先を見越し、木材加工をど

うするのかを考え、

必要な体制の整備をしなければならないのに、町の計画は抽象的で将来ビジョンが見えてこない」と、30年余りにわたって下川町森林組合の役員を務めた、元町議の梅坪龍雄さん(77)が嘆く。

若くして父をなく

では分からない世界。50年、100年と積み上げてきたものを、みんなで守るという理念の下に進めるべき」が持論だ。

3年前、町の林業振興審議会の会長に選任された。「人工林中心ではなく、天然林の利用価値に対す

る視点を持ち、総合的な施策を考えるべき」と主張した。

将来ビジョンが見えない計画

足元を見つめ、地道な森林整備を

し、農業を継ぐ。30歳のころから、営農に余裕ができると山林を買い、山仕事もやる。農家林家を

続けてきた。「そのうち山に愛着を感じてしまっただけ」。

今は町内に森林45分を天然林で占め

り、会長を辞めた。

59年前の洞爺丸台風による風倒木の大量発生をきっかけに、道内ではカラマツやトドマツなど人工林の造成が進んだ。それが育ち、近年は全伐採量の9割近くを人工林が占める。

「ようやく成長し

画」などには疑問を感じる。「地域住民の協力を得ず、どう取り組むのか。森林づくりをどう進めるのか。住民はどうすればいいのか——正しい意見を議論するために情報を知らせるべきだ。説明会も必要です」(梅坪さん)と注文をつける。

「ようやく成長し

と注文をつける。

た感想も聞く。番組のなかで「森林組合の就職希望者が30人待機中」と報じられた。「すごいね。本当かい?」と、私も取材に訪れた道庁で聞かれた。

下川町森林組合の職員数は49人(12年度未現在)。数年前から「人材エントリ」と呼ばれる登録制度を導入しており、現在は20人ほどが待機中。登録者と

面接し、2月ごろに採用の可否を決める。

「報道ステーション」で6月、下川の取り組みが全国で紹介された。喜んだ関係者がいた一方で、「竜宮城のような話だった」「これで幻想を持つ移住希望者も増えるね」といった覚め

る。 「実際に雇用できないのは、年間にせいぜい1〜2人。(採用しない人には)登録を継続するかどうかを尋ね、他の道を勧めることもある」と、山下邦廣組合長が説明する。

冬場は作業量が少なく、山仕事は甘くない。思い描いた森づくりと現場とのギャップを感じる人もいる。不況や長引く地方経済の低迷を受け、近年でこそ組合を辞める人は少ないが、以前は新規職員の定着率が3割程度

の時期もあった。「竜宮城」とは別の世界である。

林業・林産業界の事情を知る複数の町民が、こう話す。

「従業員の平均年収は男性200万円、女性150万円ほどで退職金も出ない。(森組を除く)ほとんどの事業所は日給月給制なんです」。

「林業作業員で住宅を新築できる人は少ない。未来都市計画で、そうした人たち

が住宅ローンを組める状況になるのか」。



サンルダム建設に向け伐採が進む町有林。下川は「環境、未来」がある町になれるのか